二　次の文章は、霞ヶ浦で開かれるブラインドマラソン（視覚障がい者が行うマラソン競技）に出場するため、さちと伴走者の亮磨が一緒にトレーニングをしている場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

亮磨は今さらながら、さちのおかれている状況を思い知らされた。

さちは、ただひたすら暗闇のなかを走りつづけている。コースを自分の目で確認することはもちろんできない。尻尾を振りながら、散歩するかわいい犬を眺めることもできない。公園に咲く、季節の草花を楽しむこともできない。

ア目隠しをされた状態で、二時間も、三時間も、＊ルームランナーを走らされると考えるとぞっとする。でも、さちのことを考えたとき、それは決して大げさな想像じゃないのだ。

「あのね、できればでいいし、もちろん余裕がある状態のときでいいんだけど」と、さちがａ遠慮がちに言った。「走ってる最中に、何か目を　Ⅰ　ような景色とか、きれいなものとかがあったら、簡単でいいから、教えてくれると助かるかも」

そう言われた瞬間、ぱっとひらめくように理解した。目が見えない相手でも、景色は共有できるんだ。俺がありのままをつたえればいいんだ。俺の言葉によって、さちをとりまく暗闇に、ほんの少しでもいろどりがくわわれば……。

「私って、わがままかな？」さちが、走りながら、不安そうに首を傾ける。「やっぱり、大変？」

「いや、そんなことないです！」

視覚障害の競技者を、できるだけ快適に走らせるのも伴走者の役目なんだ。景色や、咲いている花や、変わった情景を教えて、気分転換させたり、テンションを上げてもらったりすることも大切なんだ。

「俺がさちさんの目になりますから！」

①心を殺して伴走マシーンになる――そう誓ったｂ矢先に、感情的なことを口走ってしまった。あわてて、つけくわえた。

「もちろん……、＊廉二さんもいるわけですし」

　亮磨とさちの足音は、　Ⅱ　のくるいもなく、重なっている。もはや意識しないでも、ぴったりと腕の振りと＊ストライドは一致させられる。いっしょに何キロも走っていると、ときどき、変な感覚におちいることがある。

二人で走っているのに、一人で走っているような、イさちの体が自分の体の延長と化していくような、不思議な一体感を感じる。まるで、何年もいっしょにこうしてとなりを走ってきたかのような……。

ちらっととなりを走るさちを見た。髪を一つにしばっている。あらわになったうなじの後れ毛が、汗で濡れている。亮磨はあわてて、顔を前方に向けた。

だからこそ、感情を消さなければならない。余計な私情はさしはさまない。ちょっとでも心を許せば、あらぬ方向へ気持ちが傾いてしまいそうだった。さちを好きだと一瞬でも感じてしまったあのときの気持ちに。

「ありがとう」という、さちの言葉に、「いえ」と、短く返す。気持ちを引き締めなおした。

亮磨は前を見た。階段の横に＊スロープが設置されている。ジョギングコースはそのスロープを下らなければならない。狭いうえに、急な下り坂なので注意が必要だ。

「あと五メートルで、橋が終わります。スロープの下り坂です！」

いくらさちが駒沢公園を毎日のように走っているとはいえ、ここがいちばん危険なのは間違いない。

「三、二、一！」

目測で、距離を読む。

「はい！　下ります！」

勢いを殺すことなく、一気にスロープを駆けていく。平坦な道に出てから、さちが感慨深そうに言った。

「うまくなったねぇ。指示がスムーズになった。すごい安心感」

何も答えられなかった。べつに呼吸が苦しいわけじゃない。ありがとうございます、という、その一言が、喉の奥で引っかかる。それっきり、さちもだまりこんでしまう。

それにしても、あまりにもよそよそしすぎて、不審に思われるんじゃないかと考えた。この前も、廉二を巻きこんで、三人の空気をかなりぎこちなくしてしまった。感情を殺すにしても、もっと穏便な方法はあるはずだ。さちには、心地よく走ってほしい。②たとえ暗闇のなかを走るとしても、楽しく走ってほしい。俺が心から願うのはそれだけだ。

少なくとも、走っているときだけは、明るく、楽しく接しようと思った。適当な話題を見つけようと焦っていたら、あらぬ言葉が飛び出てきて、自分でも驚いた。

「廉二さんと……」

「廉二君がどうした？」

「つきあってるんですか？」

バカか、俺は！　何、バカなこと聞いてんだよ！

さちの顔が真っ赤になる。

「すいません！」亮磨はとっさにあやまった。「今の、忘れてください」

高校の制服を着たカップルが、手をつないで歩いている。赤ちゃんの乗ったバギーを押しながら、颯爽とスレンダーな母親がランニングしている。世界はこんなにも光り輝いている。それなのに、ウなぜ俺は使い古された廃油みたいな、どす黒い、破滅的な感情を体のなかにためこんだまま、走る、という健康的な動作をしているのだろう？　心と体が、空中分解して、ばらばらになりそうだった。

さちがおずおずと答えた。

「今度のフルマラソン、目標を達成できたら、お願いしますって答えた、半年前。それまで待ってって、私は言った。廉二君は、わかったって」

さちの曖昧な言葉を、亮磨は頭のなかで整理した。

「つまり、三時間半を切れたら……ってことですよね？」

「そのつもりなんだけど……」

エ空き缶を靴の裏で押しつぶすように、嫉妬の感情を強く強く圧縮して、何も感じないようにした。それよりも、ｃ煮えきらないさちの態度のほうが気にかかる。亮磨はさちの言葉を待った。

「でもね、最近、廉二君、急によそよそしくなって」

「廉二さんが？」

一周を走り終え、ふたたびトレーニングルームの入り口に戻ってきた。あと、九周。ガラス張りになったトレーニングルームのなかで、エアロビクスのような体操をしている女性たちが見えた。亮磨はさちの心中を察して、なるべく明るい調子で答えた。

「大会も近くなってるし、きっと練習のときは伴走者として、一線　Ⅲ　と思ったんじゃないですかね？　陸上に関しては、バカ真面目な性格ですし」

「いや、プライベートでも、廉二君、すごく冷たくなった。最近ね、あの人がいったい何考えてるのか、正直、わからないんだ。もちろん、もともと私が表情をうかがうことができないっていうのもあるかもしれないけどさ」

ドラマなんて、しょせんフィクションだ、つくりものなんだと＊愛には答えてしまった。けれど、もしかしたら私生活で起こる細かい感情の機微みたいなものを、映画やドラマやマンガは誇張して描いているだけで、根本はあまり変わりがないのかもしれない。まともな恋愛経験もない、未成年の自分が訳知り顔で答えてしまったことを深く恥じた。

人に急に冷たくあたってしまうことも、たとえ自分のなかでは整合性があったとしても、その相手にとっては理不尽で、不可解極まりない行動にうつってしまうものなのかもしれない。俺がさちと必要以上に仲良くなるのをさけようと決意したのも、自分のなかでは正しい選択だと思っている。でも、きちんと理由を説明しなければ、さちには到底理解ができない。でも、俺はその理由を言うことができない。俺も苦しい。さちも苦しい。結局、何も生み出さない。

「たぶん、廉二君、ほかに好きな人ができたんだと思う。それに、やっぱりさ、私は障害者だから　Ⅳ　が重くなったんじゃないかな」

「そんな、まさか……」これ以上、さちを悲しませるのは、俺が絶対許さないから――廉二の吐いた言葉を思い出して、亮磨はいらついた。

もしかしたら、廉二もさちに対して何らかの後ろめたさや悩みを抱えているのかもしれないと考えた。さちは、それが理解できず、わかりやすい理由を見つけて、納得しようとしている。ほかに好きな人ができたから、私は障害者だから、と。互いの気持ちは離れていく一方だ。

「廉二君は、ケガする前は、もともと陸上で実業団に入るつもりだったらしいんだけど、四月から四年で、自分の夢をあきらめて、ふつうに就活をはじめたみたい。だから、きっと出会いもたくさんあるだろうし、ね」

さちさんを、泣かせたくない。絶対に。自分のしでかした罪を忘れかけて、そう純粋に願いはじめている。右手のロープをぎゅっとにぎりしめながら、亮磨は腕を振りつづけた。

「私自身もね、目が見えなくなってから、好きっていうのが、いったいどういうことなのかわからなくなっちゃって」

なんで、俺たちはもっと器用に生きられないのだろう？　③亮磨は叫びだしたくなる衝動を必死でこらえていた。ただ、前を見すえて走りつづけた。

「だって、顔がわからないんだもん。声とか、その人の雰囲気――やさしそうだなとか、とげとげしてるなとか、そういう判断基準しかないから」

さちが、やわらかくまぶたを閉じた。

「生まれつき目が見えなかったら、顔が見えない相手をどう好きになるのかっていう判断基準がしっかりあるのかもしれないけど、私の場合、つい数年前に見えなくなったわけだから、もう何がなんだかわからなくなっちゃって……」

さちの息が少しだけはずんでいた。

「小鳥が卵から出て、最初に見た動くものを親って思うみたいにさ、私が廉二君のことをいいなって思ったのは、外に出てはじめて助けてもらった人だからかもしれないって。そんなことを疑っちゃう自分がすごく、すごく嫌になる」

　　　　Ｘ　　　　。そんなことはないですと、目の見える自分が言うのも、おかしい気がした。結局のところ、オ俺たちは深いところではわかりあえない。そんなあきらめの感情が深く手足をしばりつけている。

「とにかく……」何か言わなければいけないと焦り、あわてて口を開いた。「とにかく、かすみがうらで、三時間半を切りましょう。すべては、それからです。あと、三ヵ月がんばりましょう」

もし、達成できなかったら？　俺が足を引っ張ってしまったら？　気弱な考えはとめどなくあふれてくる。④そんなネガティブな思考を、一つ一つ、ふりほどくようにし、俺たちは走っていくしかないと思った。

（朝倉宏景　『風が吹いたり、花が散ったり』）

（注）

＊　ルームランナー……屋内でランニングやウォーキングを行うための器具の商標名。

＊　廉二……元陸上部員の大学生。さちのもう一人の伴走者。

＊　愛……亮磨のアルバイト先の先輩。

問一　傍線部ａからｃの語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

ａ　遠慮がちに

１　強く遠慮するような感じで　　　　　　２　遠慮していると見せかけながら

３　何となく困ったように　　　　　　　　４　恥ずかしそうな口調で

５　気兼ねをして控え目に

ｂ　矢先に

１　物事の発生を予想しているように　　　２　物事を失敗させるかのように

３　物事を始めるちょうどそのときに　　　４　物事への応援があるかのように

５　物事を終わらせようとするときに

「おずおずと」からの出題に変更をお願いできますでしょうか。

ｃ　煮えきらない

１　はっきりした姿勢を見せない　　　　　２　順調な進行を阻むような

３　真面目で芯がしっかりしている　　　　４　決していい加減に妥協しない

５　真実を隠してごまかそうとする

問二　空欄　Ⅰ　から　Ⅳ　に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　Ⅰ　みはる　　Ⅱ　寸分　　Ⅲ　敷こう　　Ⅳ　気

２　Ⅰ　みはる　　Ⅱ　一分　　Ⅲ　引こう　　Ⅳ　身

３　Ⅰ　うばう　　Ⅱ　一秒　　Ⅲ　切ろう　　Ⅳ　荷

４　Ⅰ　うばう　　Ⅱ　一分　　Ⅲ　敷こう　　Ⅳ　身

５　Ⅰ　ひく　　　Ⅱ　一秒　　Ⅲ　切ろう　　Ⅳ　気

６　Ⅰ　ひく　　　Ⅱ　寸分　　Ⅲ　引こう　　Ⅳ　荷

問三　傍線部①とあるが、ここには亮磨のどのような様子が表現されているか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　伴走者という難しい仕事を完遂するためには、生半可な気持ちを持っていてはならず、アルバイト気分などの甘えは一切捨て去って、一個の正確な機械になったつもりで努めなければならないという真剣な様子。

２　自分が求められているのは、あくまでも伴走者としての役目であり、さちに対して異性としての好意を持つということは許されるはずがないので、そんな気持ちは忘れて伴走に集中しようと自分をいましめる様子。

３　最高の伴走者だと認めてもらって、さちからの好意を得るためには、ライバルである廉二よりも優れた伴走をしなければならないと思い、それには非情に徹した冷徹な機械のようになる必要があると決意する様子。

４　自分には、さちに対してことあるごとに好意を示してしまう良くない傾向があることを自覚しており、さちにそのせいでいやがられていることもわかっているので、とにかく伴走に集中しようと焦っている様子。

５　伴走者は主役ではなく、競技者を助けるだけの役割でしかないのに、つい自分が中心のような気持ちになってしまいがちなので、気になったときは必ず目立ちたがろうとする自分の気持ちを殺すように心がける様子。

いくつか学校から意見があるため、ご確認・修正をお願いできますでしょうか。

問四　傍線部②について、文法的な説明として正しいものを、次の中から一つ選びなさい。

１　「たとえ」の品詞は接続詞である。

２　「走る」の品詞は動詞で、活用形は終止形である。

３　「楽しく走ってほしい」は三文節五単語から構成されている。

４　「俺」は体言であり、固有名詞に分類される。第一回同様に文の成分に関する問題にお願いいたします。

５　「それだけだ」の末尾の「だ」は過去を表す助動詞である。

問五　傍線部③について、亮磨はなぜこのような様子でいたのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　さちのことが好きな自分が懸命にあきらめようとしているのに、さちは何も気づかずに平気で恋人の廉二とうまくいっていないなどの愚痴をこぼしてくるので、さちにとって自分は本当にただの伴走マシーンでしかないのだと自覚したから。

２　自分はさちの幸せを思って恋心を抑えたり伴走に励んだりしており、廉二はさちを悲しませまいと努めているはずなのに、何もかも思うような結果に結びつかず、むしろ逆の方向に進むようで、悔しさやいら立ちがこみ上げてきているから。

３　どんなにさちのことが好きでも、彼女からは決して歓迎されるはずもなく、もし気づかれれば伴走者として一緒に走ることさえできなくなることが目に見えていて、廉二のようなかっこよさを持たない自分がいやでたまらなくなっているから。

４　相手が誰であっても、本気で恋をすれば成就しないことや嫉妬などで苦しくなるばかりだとわかっているのに、廉二のように気楽な遊びとして恋を楽しむことがどうしてもできない、やたらと真剣になりすぎる自分の性格にうんざりしたから。

５　人生を生きるときには、先を読んだり損得を考えたりしてもっと器用に生きなければならないはずなのに、さちや自分や廉二のような真面目な人間はうまく立ち回ることが苦手で、いつもつらい思いばかりすることになると痛感したから。

いくつか学校から意見があるため、ご確認・修正をお願いできますでしょうか。

問六　空欄　Ｘ　に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　廉二との恋がうまくいかないことを期待した　　　２　さちも自己嫌悪するのかと共感した

３　さちの一方的な誤解をとがめたかった　　　　　　４　返すべき答えが見つからなかった

５　見当違いなことを言うのがおかしかった

空欄補充ではない形式の問題に差し替えをお願いできますでしょうか。可能でしたらさちの心情を読み取る問題をとのことです。

問七　傍線部④とあるが、このときの亮磨について説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　誰でも何らかの形で鬱屈を抱えながら懸命に生きているのであり、ときにはあまりのうまくいかなさに絶望したり、投げだしたくなったりすることもあるかもしれないが、そうした暗い気持ちや恐れに負けないでとにかく努力を重ねながら前に進むことが大事だと、まさに未来への不安に押し潰されそうな今の自分に向かって必死に言い聞かせている。

２　さちがあまりにもネガティブな思考にとらわれてしまっており、廉二のどのような言動に対してもすべて否定的に悪い方向で解釈してしまっていることを知って、亮磨自身もその思考に引きずられて暗い未来しか見えなくなりつつあることに気づき、自分が肯定的で陽気な態度で過ごすことでさちにも明るさを取りもどしてもらおうと考えている。

３　伴走者の先輩として尊敬していた廉二に人間としては残念な一面があることを、廉二の恋人のさちから知らされて失望したが、人生は失望したり裏切られたりの連続だと割り切って、何かを他人に期待することなく自分の力で精一杯乗り切っていくようにすればよいと肯定的に捉え、さちを慰め励ましながらがんばっていこうと前向きになっている。

４　さちに幸せになってもらうために、フルマラソンで三時間半を切るというさちと廉二との交際につながる約束を達成させるために全力を尽くそうと決意し、もしかすると達成できないかもしれないとか自分が足を引っ張るかもしれないとかいった否定的な考えは封印して、さちの人生を助けるという意味でも伴走者になろうと意欲を燃やしている。

５　自分にとっては成熟した大人で充実した人生を送っているように見えた廉二やさちも、まだ自分の行動や判断に自信がなく、不安を抱えながら懸命に毎日を生きているのだと知って、一方では気落ちしながら一方では共感し、大人になっても年齢を重ねても、自分たちは永遠に何かに悩みながら生きるしかないのだという真実と向き合おうとしている。

１の表現をもう少し具体的にお願いできますでしょうか。また、２から４のいずれかに「進むべき道が限定されている」というニュアンスの誤答を入れていただけますでしょうか。

選択肢の修正が難しい場合、「亮磨の人物像」などの出題も提案されております。

問八　波線部アからオについて、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　波線部ア「目隠しをされた状態で、二時間も、三時間も、ルームランナーを走らされると考えるとぞっとする」には、さちの伴走者として二時間も三時間もいっしょに走り続けて、いいかげんにいやになってきた亮磨の様子が表現されている。

２　波線部イ「さちの体が自分の体の延長と化していくような、不思議な一体感を感じる。まｓるで、何年もいっしょにこうしてとなりを走ってきたかのような……」には、さちと一緒に走る幸福感で現実の苦しみを忘れる亮磨の様子が表現されている。

３　波線部ウ「なぜ俺は使い古された廃油みたいな、どす黒い、破滅的な感情を体のなかにためこんだまま、走る、という健康的な動作をしているのだろう？」には、生き生きとした活動に相反するわだかまりを抱く自分を疎んじる亮磨の様子が表現されている。

４　波線部エ「空き缶を靴の裏で押しつぶすように、嫉妬の感情を強く強く圧縮して、何も感じないようにした」には、さちへの恋心から生まれた嫉妬をついに克服して、さわやかな気持ちを感じることができた亮磨の歓喜する様子が表現されている。

５　波線部オ「俺たちは深いところではわかりあえない。そんなあきらめの感情が深く手足をしばりつけている」には、さちの恋愛の悩みを聞いて、成就する恋愛などしょせんフィクションでつくりものだと知り、絶望する亮磨の様子が表現されている。